まちの元気じるし登場
～企業訪問　越後長野温泉 嵐渓荘～（下田商工会）

社長の大竹啓五さん（中央）、
女将のチヱさん（右）、妻の由香利さん（左）

泥や流木で滅茶苦茶になった木造本館１階

渓流沿いの一軒宿として名高い越後長野温泉「嵐渓荘（らんけいそう）」は、山あいに、まるで昆布茶のようなしょっぱい温泉と、大正末期の料亭を移築した風情ある建物が印象的な秘湯の宿です。

今回は40歳の若き経営者、観光開発嵐渓㈱代表取締役社長の大竹啓五さんにお話を聞きました

１０日間で営業再開の決断

今年７月３０日未明の豪雨で旅館前を流れる守門川が増水し、旅館の玄関に水が入ってきました。水量は増え続け、１階にあるフロント・売店・ラウンジ、大浴場、事務所等に甚大な被害を受けましたが、８月１０日には営業を再開、そのスピードに驚かされました。

水害のあった日のうちに、地元の親せきが３０人ほど駆けつけて、途方に暮れるほどだった館内の泥出しをして、床が見えるようになりました。幸いにも源泉やライフラインは無事、建物の被害も１階部分だけでした。社長は、この１日の状況を見て、お客様の目に触れる表の部分は１０日程で復旧できるように感じたそうです。しかし、気掛かりだったのは裏方の事務所で、物の要不要の判断や、物を移動しての掃除があり、片付くのか心配だったそうです。そこは、母である女将が長年の現場経験に基づく勘で「できる」との判断をしました。元来、社長も女将も、何事も有言実行で挑戦する気質もあり、お盆前の再開を目標に設定しました。

それからの期間、従業員さんとボランティアの方を含む延べ２００名の人海戦術で、復旧が始まりました。今回は市街地の被害が少なかったので、業者さんも頼む前からそっせんして駆けつけ、朝早くから夜遅くまで作業してくれたそうです。

先代社長からのバトンタッチ

４代目となる啓五さんは、３年前に代表取締役に就任しました。実は、５年前に先代の社長が病を患い、１年半という余命宣告を受けました。それから先代は、自分が実現したい仕事をやりながら、旅館経営をバトンタッチしていきました。

先代がやりたかったことの一つは、温泉の品質を保つために源泉（鉱泉）の井戸をもう一本掘ることでした。頻繁に泥がつまる以前の源泉パイプは、川の近くを通っていましたが、新しい井戸はパイプも川から離れた場所に移動し、設備も使い勝手が良いように位置を高くしました。今回の水害では、ボイラーのコントロールパネル（電子部品）が水に浸からず、電気の配電盤もあと数センチのところで無事でした。

啓五さんは、それから先代の仕事だった温泉、設備、お金の管理を任されるようになりました。お客様に対しても、取引先に対しても、従業員に対しても、「できない」と言えない状況で、死に物狂いで引き継いだといいます。残された時間が決められていたが故に、強制的に事業承継が進行しました。この経験を通して、「覚悟が決まらないと承継はできない。」と話してくださいました。

吊り橋を渡る一軒宿から「妙涼和樂嵐渓荘（みょうせんわらく）」へ

うたげのま高城

「吊り橋を渡る一軒宿」として知名度を上げてきた嵐渓荘ですが、ウェブデザイナーとしても活躍している妻の由香利さんのアイディアで、昨年から女性やグループ向けの宿にブランディングを試みました。まずキャッチフレーズを「妙涼和樂（みょうせんわらく）」へ変更。源泉が昭和２年にわき出た時に「妙の鉱泉」と名づけられた歴史があり、そこに「妙（たえ）なる湯に、みんながあつまり、和やかに楽しむ」という意味を込めました。館内外の細かなリニューアルなどもあり、その効果で嵐渓荘には女性やグループ、団体のお客様が増えつつあります。

「吊り橋を渡る一軒宿」のキャッチフレーズは渓流沿いに佇む風情ある温泉旅館のイメージを表現するものでしたが、このフレーズから受ける印象は“男性的”“隠れ宿”で、個人や二人連れのお客様を主な対象にしているように思われがちでした。しかし実際には、客室は大小あわせて１７室、８０名収容の大広間も兼ね備えており、経営の観点からするとグループや団体のお客様にも大勢ご利用いただきたいという事情がありました。

昨年は中広間を慶事・法事の他に、会議等にも利用できるように改装しています。和風でありながら床はフローリングで椅子・テーブル席、格天井で窓は雪見障子にした「うたげのま高城（たかじょう）」です。嵐渓荘は、昔ながらの温泉を守りながら、「みんなが集まり、和やかに楽しむ温泉宿」の実現に向かって進んでいます。

【お問い合わせ】　越後長野温泉嵐渓荘（らんけいそう）
〒955-0132　新潟県三条市長野１４５０　越後長野温泉
Tel　0256-47-2211　／　Fax　0256-47-2216　／　URL　http://www.rankei.com/